

学院史編纂室共同研究報告

二〇一八年度の共同研究のテーマは次のとおりである。

研究テーマ	研 究 員
宣教師研究	<p>○ルース M・グルーベル 池田 裕子（学院史編纂室） 神田 健次（顧問・名誉教授） D・H・デルミン（高等部） 舟木 讓（経済学部） 村瀬 義史（総合政策学部）</p>
関西学院の戦前・戦中・戦後	<p>○井上 琢智（元経済学部） 岩野 祐介（神学部） 大宮 有博（法学部） 辻 学（広島大学大学院） 橋本 祐樹（神学部） 本郷 亮（経済学部）</p>

（○印：主任研究員）

「宣教師研究」として、ランバス、ニュートン、ベーツを中心とした共同研究を、二〇一六年度から継続して取り組んでいる。

ルース・グルーベル主任研究員は、これまでの研究成果を研究ノート“Searching for the Lambuths in California”にまとめ、『社会学部紀要』に発表した。

神田健次研究員は、『ベーツ宣教師の挑戦と応戦』（関西学院大学出版会 二〇一九年三月刊行予定）における日本語によるベーツ論文の現代語訳と解説を担当した。

また、これまでの宣教師研究の成果も反映させながら、左記のような記念礼拝説教や講演を行う機会が与えられた。

- 1、大分教会創立一三〇周年記念講演「W・R・ランバスの〈瀬戸内宣教師圏〉の構想と展開」（二〇一八年一月三日）
- 2、大分教会創立一三〇周年記念礼拝「喜び・祈り・感謝」（二〇一八年一月四日）
- 3、神戸雲内教会創立二五周年記念講演「ミナト神戸の宗教とコミュニティー」（二〇一八年二月一日）
- 4、中学部クリスマス燭火賛美礼拝「Keep this holy fire burning」(二〇一八年二月二日)
- 5、同志社大学特別チャペル「敵意をこえて和解へ」

(二〇一九年一月二三日)

なお、これまでの学院史に関連した教会の創立記念説教や講演、及び紀要論文が、左記のように今年度出版物として刊行された。

1、『向日庵「寿岳文章一家の文化的業績についての調査研究会」講演録』(「民芸運動における寿岳文章の貢献」が掲載 二〇一八年四月 特定非営利活動法人向日庵)

2、『"Mastery for Service" を提唱した関西学院第四代院長 C・J・L・ベーツ』(『キリスト教学校教育』七二三号 二〇一八年五月一五日)

3、『神戸東部教会創立一〇周年記念講演・草創期の神戸東部教会の歩み』(二〇一八年五月二〇日 神戸東部教会)

池田裕子研究員は、広報誌『K. G. TODAY』に、次の四本を日本語と英語で執筆した。①「特別招待—ラトビア建国一〇〇年—」『Special Invitation: The Centennial of the Founding of Latvia』②「関西学院を有名にした小説」『"Kwansei Gakuin finds Fame in a Novel"』③「昭和天皇の「引見」」『An Audience with the Emperor Showa』④「財務長官と呼ばれた男」『D. R. McKenzie, the Prince of

Mission Treasures"。

広報誌に書いた一本文の原稿からもわかるように、二〇一八年、ラトビア共和国が建国百年を迎えた。それを記念し、神戸三田キャンパスで開催された「ラトビア、融合の建築」『LATVIA, ARCHITECTURE AT CONVERGENCE』展のために小冊子「関西学院のラトビア人教師イアン・オゾリンをめぐって一九一八—二〇一八」を作成した。また、同窓会東京支部の有志と協力し、東京の駐日ラトビア共和国大使館で、英語サロン『Latvia's Century』を開催した。

昨年に引き続き、日本カナダ会から依頼を受け、兵庫県政一五〇周年を記念する小冊子「兵庫県の学校教育とカナダの関わり—関西学院とカナディアン・アカデミー—」を作成した。

『母校通信』には、「関西学院スピリットの生き証人—関西学院発祥の地 記念碑—」と「関西学院スピリットの生き証人—ニユートン第三代院長と共に旅立ったもの」を執筆した。

大学の授業では、春学期の「カナダ研究入門A」(代表 水戸孝道法学部教授)と秋学期の「カナダ研究入門B」(代表 水戸孝道法学部教授)の初回を担当し、宣教師を通じ

ての関西学院とカナダの歴史的つながりを学生に語った。

また、神学部チャペルで行った「三つの奇跡の物語」と題する話の中で、宣教師研究の成果の一部を紹介した（二〇一八年十一月二十六日）。

このほか、同窓団体から依頼を受けて行った講演は次の通りである。

① 「関西学院の発展とカナダ」、関西学院倶楽部、二〇一八年四月一七日。

② 「一枚の写真に導かれて〜ベーツ院長と関西学院〜」、関学電業会総会、二〇一八年七月九日。

③ 「一枚の写真に導かれて〜関西学院とカナダ〜」、関西学院同窓会東京支部三日月会、二〇一八年一〇月一七日。

宣教師の子孫の交流としては、六月にベーツ第四代院長ご令孫のアルマン・デメストラルさんの訪問を受けた。また、カナダ研究客員教授として九月から一月まで滞在されたポール・ウィリアムズさん（D・R・マッケンジーご曾孫）とも情報交換を行った。その結果、一二月にお祖母様の子ども時代の着物を大学博物館にご寄贈いただくことができた。

さらに、ルース・グルーベル主任研究員監修の下、ベ

ツ資料の翻訳を続け、『ベーツ宣教師の挑戦と応戦』の原稿としてまとめた。

「関西学院の戦前・戦中・戦後」も、継続した共同研究のテーマである。

「吉岡美国と敬神愛人（一）〜（六）」（『関西学院大学史紀要』六（二〇〇〇）〜一〇（二〇〇四）号、一二号（二〇〇六））執筆以降、懸案であった第五代院長神崎驥一の伝記執筆の準備として関連史料・資料の収集を開始し、詳細な年譜を作成中である。

昨年度から再開した神崎驥一第五代院長の伝記執筆のための資料収集を継続した。昨年度からの計画に従い、神崎が在籍していたと思われる香登小学校を訪問（三月七日）し、在籍調査を行った。ただ、同校に保存されている卒業生名簿を調査したが、神崎および兄妹の氏名を発見することは出来なかった。さらに、武用光一氏のご紹介を得て、甲府在住の佐藤信子氏への聞き取りを六月四日に行った。事前に多くの質問事項をお送りしていたので、それにお応えいただく形で、ご回答を頂くと同時に、戸籍等のコピーを頂戴できた。その詳細は神崎驥一伝記執筆に際して利用するつもりである。ただ、驥一之父の名前につい

ては、これまで同夫人の証言(「夫 驥一のこと」『亘平』三六・三七号 一一六頁 昭和四十八年一月)なお、誤植の可能性は否定できない)等に従い『改訂増補版 関西学院事典』等で「陣三」と記してきたが、戸籍により「陣三」(原文にルビあり)であることが判明した。なお、現在、改訂版の出版が予定されている『日本キリスト教歴史大事典』についても、その名称を正しく「陣三」と修正していただくように編集部に依頼した(六月)。

七月三日、乾精末の研究者で「Inui Kiyosue: A Japanese peace advocate in the age of “yellow peril.”」(*World History Bulletin*, Sept. 22, 2015)の筆者であるレイセル氏(Masako N. Racel, Kennesaw State University)の訪問を受け、池田裕子氏とともに対応し、学院史編纂室所蔵の諸資料を提供し、当日、提供できなかった資料については、後日、ご本人に送った。

また、七月二一日、大阪経済大学の依頼により、同校の『年史』編纂の準備作業の一環として、『関西学院百年史』等の編纂過程を聞き取りたいとの要望に応じて、「大学史編纂をめぐる―『関西学院百年史』を事例に―」を同校にて講演した。なお、同校の編集に参加するメンバー四名が一〇月五日に学院史編纂室を訪問されたため、当日開催

されていた展示や書庫等を案内した。さらに、十一月二六日、東洋英和女学院の依頼により、同校の『事典』編纂の準備作業の一環として、『関西学院事典』編纂過程を聞き取りたいとの要望に応じて、『関西学院事典』(二〇〇一)編纂をめぐる―」を同校にて講演した。

なお、「戦間期関西学院における『恒久平和』運動について―神崎驥一、乾精末と国際連盟協会、排日移民法、太平洋問題調査会、軍事教練―」(中)を執筆し、本号へ投稿し、掲載されている。